

Before
After

道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信 第1号
令和6年5月13日(月)
発行者 校長 井浦 博史

ほじょ犬を知っていますか

校長 井浦 博史

「ほじょ犬」のことを知っていますか。

盲導犬のことを知らない人は少なくないと思いますが、ほじょ犬のことを知っている人は、そう多くはないと思います。あまり一般的ではないでしょう。

ほじょ犬とは、視覚や聴覚に障害のある方、身体が不自由な方の生活の補助をする犬のことで、実は今から22年も前の平成14年に制定された身体障害者補助犬法に定められています。身体障害者補助犬とは、法律上では、盲導犬、介助犬、聴導犬を指しており、それ以外は認められていません。また、補助犬を育てる人や団体、使用する人の役割や責任についても定められており、誰でも簡単に補助犬を育てたり、使ったりできないようになっています。つまり、それだけ、しっかりと制度が整っているということです。なお、この法令には国や地方自治体などの施設は、補助犬の同伴入場を拒んではならないと記されており、また不特定かつ多数の者が利用する施設も同様に補助犬の同伴入場を拒んではならないと記されています。当然、施設を著しく壊したり、汚したり、使えなくしたりする場合は、入場を拒むことができますが、盲導犬が建物を壊したという話は聞いたことがありませんので、施設を壊すことについては、あまり気にする必要はないと思います。このように、法令・制度に基づいて育てられ、使用者の適切な管理のもと補助犬は日本中のほほどのような施設でも自由に入場できるのです。では、スーパーやデパートといった人の集まる施設の入り口などで、右のような「ほじょ犬に関するマーク」を見たことはありませんか。このシールは、どうして施設の入り口に貼られているのでしょうか。法令では、基本的にどのような施設でも同伴して入場できるとあるのですが、現実として食品などを扱う施設では、入場を断られることもあるそうです。また、この施設は補助犬が入れる所であるとアピールしなければ、施設を利用している他の人から苦情が来るなど、理解を得られないといったこともあるようです。補助犬について理解が進んでいるアメリカやヨーロッパなどには、このような補助犬マークはないとのこと。

なお、日本では、盲導犬を希望している視覚に障害のある方は約3千人といわれていますが、実際に活動している盲導犬の頭数は約830頭、この頭数は年々減少しており、最も多かった2011年から200頭近く少なくなっています。その理由は様々あるようですが、盲導犬を育てるためには多くのお金がかかり、そのほとんどが寄付で成り立っているということも頭数が減少している一つの原因かもしれません。ちなみに介助犬は全国で60頭程度、聴導犬は50頭ほどだそうです。各国の盲導犬の活動数ですが、アメリカでは約1万頭、日本より人口の少ないヨーロッパの国々でも日本より多くの盲導犬(1000~6000頭)が実際に活動しているとのこと。

盲導犬には限りませんが、誰もが自由に安心して暮らすことのできる社会づくりに補助犬はとても役立っているのです。街で見かけることがありましたら、ちょっとこのことを思い出してください。



身体障害者補助犬法の啓発のためのマークです。



～ 令和6年度の道徳の授業がスタートしました ～

1年生の授業開き後の道徳では①「掃除の神様が教えてくれたこと」②「仮入部」③「挨拶しますか、しませんか」について考えました。進級し学校生活が始まる時期に、ふさわしい単元でもあります。①「掃除の神様が教えてくれたこと」では、ディズニーランドの清掃部門に配属された主人公が、指導員のチャック氏に出会い、裏方である清掃員の仕事に誇りをもって取り組もうとする気持ちの変化を読み取りました。②「仮入部」では、中学校に入学してきて間もない時期に主人公が部活動の選択について悩む内容で、自分自身のこととして今までとは違う大人びた付き合い方を学びました。③「挨拶しますか、しませんか」では、知らない人々から挨拶され清々しい気持ちになった男性、山での挨拶で疲れが癒された女性などの体験談から挨拶の持つ力を見直しました。「おじぎは頭と首を下げるという無防備な体制なので相手を信用しているという証だ」という意見が出るなど、改めて人間関係を作り上げるための大切な動作であると認識した人が多く見られました。道徳で考えたことが学校生活でも生かせるといいですね。



2年生の道徳授業では、スキージャンパーの高梨沙羅選手について書かれた「鳥のように空を飛びたい」、そして、彩の国道徳『未来に生きる』より「すべての人に読書の楽しさを」という教材を扱いました。高梨選手に関する教材では、目標を達成するために自分を自制し、規則正しい生活を送る高梨選手のすごさに触れ、これから自分の生活に生かすことができることを考えました。振り返りには「生活リズムを決めて時間を有効に活用したい」「自分の習慣を作り、弱さに負けず生活したい」などの言葉が見られました。

また、「すべての人に読書の楽しさを」では、図書館で働く佐藤さんの生き方を通して、よりよい社会の実現のためには何が大切であるかを一緒に考えました。振り返りには、「困っている人がいたら自分から助けたい」「小さなことでも行動に移していきたい」などの言葉が見られました。道徳の授業で感じたことや考えたことをほんの少し意識して生活することで、みんなのこれからの人生は大きく変わっていくことと思います。共に考える時間をこれからも大切にしよう。



3年生の道徳の授業開きは、何種類かの字体、フォントを提示して、「UDデジタル教科書体」という字体が、なぜ考え出されたのかを紹介しました。その後、右のような場面でそれぞれどんなことを言っているのかセリフを考えて発表しました。どのセリフも正解で、みんなの感じ方が全部正解、それぞれ違うことを確認したうえで、他者との関わりがあると、より豊かにものを見られることを実感しました。感想には「みんなで1つのことを考えているけど、答えが違って考えも違うと面白いと思った。」「人の思いは見えないけれど思いやりを大切にしていきたい。」「相手のことを考えて行動すると見えてくるのが分かった」といった感想がみられました。



にじいろ学級の最初の道徳は「自分らしく」について考えました。新学年になり、希望と不安、新たな目標をもって生活がスタートした中で、自分らしさについての3つの詩を読みました。そして3つの詩の中で心に残った言葉に線を引き、線を引いた理由を発表し合いました。始めに葉祥明^{ようしょうめい}さんの詩。

「迷ってるんだ 自信も無いし 怖いんだ そう思っているのは 君の影なんだ 本当の君は 夢に溢れ^{あふれ} 行動力と勇氣に満ちている 素敵な奴なんだよ」

2番目に谷川俊太郎さんの「じぶんをはぐくむ」。この詩の中で「自分をはぐくむのは難しい 自分を枯らすのは簡単だ」「あなたはあなた自身を超えていく」などの言葉が一番心に残ったそうです。最後に金子みすずさんの「私と小鳥とすずと」。有名な「みんなちがって、みんないい」にたくさんの生徒が線をひいていました。同じ詩を読んでも、一人ひとり感じ方がちがうこと。その感じ方の中に「自分らしさ」があり、心に残った理由を考える中で「自分らしく」ありたいと思う自分の気持ちと向き合うことができました。谷川俊太郎さんの「じぶんをはぐくむ」の詩の最後の部分。「自分を発見し続けることで 自分を大切に見つめたい 今日明日もいつまでも」今年も答えのない道徳の授業の中で、にじいろ学級のみんなが自分で考え、新しい自分を発見できたらいいなと感じました。